

## 上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査の成果について

平成26年度の発掘調査は、①前中西遺跡第一次、②藤之宮遺跡、③前中西遺跡第二次の3箇所を実施した。

### ①前中西遺跡第一次

(1)調査期間 平成26年5月19日～8月29日

(2)調査面積 計760㎡(1・2区500㎡、3区260㎡)

(3)検出された遺構・遺物

〈遺構〉 堅穴住居跡	5軒	(弥生時代中期後半)
掘立柱建物跡	1棟	(古墳時代後期)
柵列跡	2列	(古墳時代後期1、中世以降1)
溝跡	6条	(弥生時代1、時期不明5)
土坑	18基	(弥生時代中期後半7、時期不明10、現代1)
方形周溝墓	1基	(弥生時代中期後半)
土器棺墓	2基	(弥生時代中期後半)
河川跡	1箇所	

ピット多数

〈遺物〉 弥生土器、石器、管玉、土師器、須恵器などコンテナ13箱

(4)調査概要

前中西遺跡第一次調査箇所は、遺跡範囲北西部にあたる。今回の調査では、過去に近隣で実施した調査成果から主に弥生時代の集落が確認されることが想定されていたが、第1区では堅穴住居跡を故意に埋め戻して大型の方形周溝墓が構築されていたことが確認された。方形周溝墓は、南側1/2程の検出であったが、溝の外縁で約30mを測り、これまで本遺跡で確認された方形周溝墓の中で最大規模のものであることから被葬者は当時の有力者であったことが考えられる。集落内に大型の方形周溝墓を造営する事象は、南関東地方における弥生時代の拠点集落に認められるものであることから本遺跡が南関東地方の影響下にあったことを裏付ける大変貴重な成果である。



第1区全景(南から)



第1区大型方形周溝墓

## ②藤之宮遺跡

(1)調査期間 平成26年10月7日～12月25日

(2)調査面積 計800㎡(1区500㎡、2区300㎡)

(3)検出された遺構・遺物

〈遺構〉 竪穴住居跡 18軒(古墳前期3、古墳後期13、奈良1、平安1)  
掘立柱建物跡 1棟(古墳時代後期)  
柵列跡 2列(江戸時代)  
溝跡 7条(中世以降1、時期不明6)  
土坑 24基(弥生1、古墳後期3、近世5、時期不明12)  
井戸跡 4基(古墳前期1、古墳後期1、奈良・平安1、近世1)  
畠跡 1箇所(近世)  
ピット多数

〈遺物〉 弥生土器、土師器、須恵器、石製紡錘車、土錘などコンテナ11箱

(4)調査概要

藤之宮遺跡の調査は、遺跡範囲北東部(第1区)と北中央部(第2区)の2箇所で行った。第1区では溝跡、土坑、畠跡などが確認されたが、遺構の分布は希薄であったことから本遺跡北東部についてはその範囲をほぼ確定することが出来たと言える。第2区は、前年度に実施した調査箇所の南側に隣接する。前年度と同じく今回の調査でも古墳時代前期から平安時代までの集落が確認されたが、集落はさらに南側に広がっていることが判明した。また前年度と同じく竪穴住居跡は同じ場所に何回も建て替えられていたことから本遺跡では住みやすい場所が限定されていたことも再確認された。今後の課題としては、集落の南北の広がりを把握することが挙げられる。



第2区古墳時代後期の竪穴住居跡



第2区全景(東から)

## ③前中西遺跡第二次

(1)調査期間 平成26年11月25日～平成27年3月25日(予定)

(2)調査面積 計745㎡(4区545㎡、5区200㎡)

(3)検出された遺構・遺物(※平成27年3月11日現在)

〈遺構〉 竪穴住居跡 14軒(弥生中期後半4、古墳後期9、平安時代1)  
掘立柱建物跡 1棟(古墳時代後期)  
柵列跡 2列(古墳時代後期)  
溝跡 23条(古墳時代後期18、平安時代1、時期不明4)  
土坑 27基(弥生時代1、古墳時代後期1、時期不明25)  
方形周溝墓 1基(弥生時代中期後半)  
ピット多数

〈遺物〉 弥生土器、土師器、須恵器などコンテナ14箱

#### (4) 調査概要

前中西遺跡第二次の調査は、遺跡範囲中央南（第4区）と北東部（第5区）の2箇所を実施した。第4区は前年度に実施した調査箇所の東側に隣接する。確認されたのは、前年度と同じく古墳時代後期の集落が主体となるが、調査区東端では弥生時代中期後半の方形周溝墓が1基確認された。第5区は、平成21年度に実施した調査箇所の東側に隣接する。隣接調査箇所と同じく今回の調査でも弥生時代から平安時代までの集落が確認された。特に弥生時代は、本調査箇所付近が集落の中心と考えられる箇所であり、今回の調査でまたさらに竪穴住居跡が数軒確認されたことから本遺跡の弥生時代集落が非常に大規模であったことを改めて証明する成果を得ることが出来た。また古墳時代後期の竪穴住居跡からであったが、縄文時代後・晩期の祭祀具と考えられている独鈷石（どっこいし）がほぼ完形で出土した。独鈷石は緑色岩製であり、周辺に位置する弥生時代住居からの流れ込みと思われる。



第4区全景（東から）



第5区弥生時代中期後半の竪穴住居跡



第5区古墳時代後期の竪穴住居跡



独鈷石出土状況

## オ 幹線第3号線道路改良工事地内遺跡発掘調査の成果について

### 樋の上遺跡発掘調査

- (1) 期間 ①4月下旬～8月上旬  
②11月下旬～12月末
- (2) 場所 幹線第3号線道路改良事業地内（三ヶ尻・久保島地内）
- (3) 原因 道路拡幅事業
- (4) 面積 1,739㎡
- (5) 概要

調査地点である三ヶ尻は、櫛引台地から東に展開する新荒川扇状地とそこから広がる妻沼低地のちょうど中間に立地している。

調査では竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡6軒、溝跡7条、火葬跡2基、土坑54基、ピット多数であった。主体的な時期は「平安時代」、大体9世紀後半～11世紀と考えられる。一部の掘立柱建物跡は中世と推定され、一部の住居跡では古墳時代後期と推定されるものだった。

調査区域の中央部分では、多くの土錘とともに、幅が最大5mもの規模になるであろう南北方向に伸びる溝跡を確認した。並行して現在は用水路が存在していることから、当時からの荒川支流の流路跡と推測できる。また、他にも南北方向に伸びる溝跡が数条検出されたが、そのうち一番西で検出された溝跡から多量の土器（9世紀後半）が検出された。土層断面から平安時代から中世以降にかけて長期に渡っての利用が考えられる。流路の可能性もあるが、溝より西は遺構が希薄になることから、集落の境としての区画溝と考えられる。

また今回の調査箇所は幅にして約8m、長さにして約250mの東西に長い調査となった。調査区画の西ではローム層が確認され、東にいくにつれそれが希薄となり、東では礫層となっていく。そのことから、この地点は立地から扇状地の末端と想定でき、扇状地から低地への落ち込んでいく様相を知ることができた。



調査区中央 溝跡断面（流路跡か）



調査区東 住居跡（灰釉陶器 碗）



調査西区全景

## カ 民間開発による前中西遺跡発掘調査の成果について

### 前中西遺跡

民間起因による発掘調査①の概要

原 因：共同住宅建設

調査主体：熊谷市前中西遺跡調査会

場 所：上之字衣川 2 5 7 1 - 2、2 5 7 2 - 1、- 2、- 3 の各一部

面 積：194.19 m<sup>2</sup>

調査期間：平成 26 年 4 月 30 日～7 月 31 日（発掘作業のみ）

経 費：1,140,290 円（事業者よりの委託金）※整理調査の経費は含まない。

調査体制：調査員 1 名（主任）

作業員 5 名（最大雇用数）

出土遺物：コンテナ（60×40×15 cm）8 箱

成 果：弥生時代中期後半の集落跡である。竪穴住居跡 6 軒、溝跡 9 条、土坑 9 基、土器棺墓 1 基、ピット多数を検出した。遺物は弥生土器、石器が出土した。

前中西遺跡のうち弥生時代の集落の中心地と思われる地点である。規模の大きい住居跡が密集しており、8 m を超えるものも散見される。既刊報告書『前中西遺跡Ⅶ、Ⅷ』には含まれた箇所である。

備 考：鉄屑化した焼夷弾を検出し、埼玉県警により回収され自衛隊により処理された。



全景写真（西から）



土器棺墓検出状況

民間起因による発掘調査②の概要

原 因：建売住宅・道路建設

調査主体：熊谷市遺跡調査会

場 所：末広三丁目 1 0 4 番 2

面 積：230.00 m<sup>2</sup>

調査期間：平成 26 年 8 月 11 日～10 月 31 日まで（発掘作業のみ）

経 費：民間起因による発掘調査②前中西遺跡と合算（事業者よりの委託金）

調査体制：調査員 1 名（主任）

作業員 1 3 名（最大雇用数）

出土遺物：コンテナ（60×40×15 cm）2 箱

成 果：弥生時代中期後半、古代～平安時代の集落跡である。竪穴住居跡 4 軒、

溝跡 12 条、土坑 15 基、ピット 107 基を検出した。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。

弥生時代は住居跡が希薄であり、集落の南限の状況か。地形が東へ緩やかに落ち込み、溝跡が検出された状況から、東側は農耕等の生産エリアとして利用された可能性がある。既刊報告書『前中西遺跡Ⅸ』（礫床墓ほか）の東側箇所である。



住宅箇所全景写真（西から）



道路箇所西側（南東から）

#### 民間起因による発掘調査③の概要

原因：建売住宅建設

調査主体：熊谷市遺跡調査会

場所：末広四丁目 2506 番 7、8、9、12、2509 番 2、8

面積：104.34 m<sup>2</sup>

調査期間：平成 26 年 11 月 4 日～11 月 30 日まで（発掘作業のみ）

経費：4,129,505 円（事業者よりの委託金）※1 整理調査の経費は含まない。

※2 上記、民間起因による発掘調査③前中西遺跡と合算した額である。

調査体制：調査員 1 名（主任）

作業員 10 名（最大雇用数）

出土遺物：コンテナ（60×40×15 cm）1 箱

成果：古墳時代後期を主体とする集落跡である。竪穴住居跡 2 軒、掘立柱建物跡 4 棟、土坑 3 基、ピット少数を検出した。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。

礫の混じる地山に遺構が構築されたのが特徴的である。意図的に堅牢・水はけの良い地盤を選定した可能性がある。集落は竪穴住居跡と、掘立柱建物跡で構成されている。既刊報告書『前中西遺跡Ⅲ』の東南側箇所である。



東側住宅箇所全景（南から）



西側住宅箇所全景（北東から）

## キ 池ノ上遺跡発掘調査の成果について

- (1) 期間 平成26年10月27日～平成27年2月28日
- (2) 場所 妻沼字池ノ上地内
- (3) 原因 分譲住宅12軒 道路新設事業
- (4) 面積 1,285㎡
- (5) 概要

池ノ上遺跡は旧利根川の流路跡と類される芝川と利根川の間形成された微高地に位置する。調査では竪穴住居跡が18軒、溝跡が17条、土坑が31基、焼成遺構が2基、その他ピット多数が検出され、湿地帯跡と思われるものが全体に広がっていた。

当遺跡の主体的な時期は古墳時代後期後半～平安時代時代初頭の時期と、中世～近世に至る時期の大きく2つの時期に渡って展開されている。

今回の調査区画内のあちこちに腐植土と想定されるかなり黒色の粘質土を含む遺構が検出された。今後の検証で性格が明らかになるであろうと思われるが、「池ノ上」の字名の一端となった沼地、湿地帯のようなものではないかと推測される。

また、遺構の展開が顕著にあり、調査区域の南側にはすべてが東から西へ落ち込む溝跡が平行して最大4条検出され、住居跡の8割がその溝跡より以北であった。

なお、今回の調査では土坑2基から馬骨が検出された。時期としては遺物の出土が無いので確定できないが、中世以降であろうと思われる。頭部と大腿骨付近が出土したが、頭の位置が不自然な状況であり、祭祀的な様相を持つ可能性も含め今後検討していく必要がある。



L区 多数の溝跡 検出



B区 竪穴住居跡 全景



A区 馬頭骨 検出

## ク 市内遺跡発掘調査の成果について

### ① 宮脇遺跡発掘調査

- (1) 期間 4月
- (2) 場所 野原地内
- (3) 原因 個人専用住宅建設
- (4) 面積 40.89㎡
- (5) 概要

調査では、古墳時代後期（約1,400年前）と思われる竪穴住居跡1軒、溝跡2条、ピット10基等が検出された。住居跡はカマドのみの検出で、住居の北に設置されていたものと推定された。また、東側で検出された南北に走る大規模な溝跡は集落を限る区画溝とも考えられ、その溝では両側に相対する位置に2対のピットが確認され、橋脚跡の可能性が考えられる。

調査地点は和田川を眼下に臨む江南台地の南縁辺部南斜面に立地し、これまでの調査では今回の調査地点より台地奥において縄文時代早期、古墳時代～平安時代の竪穴住居跡等が検出されており、今回の調査により、古墳時代の集落が台地縁辺部ぎりぎりまで展開していたことが分かった。



調査区全景（北東から）



竪穴住居跡カマド（北から）

### ② 石原古墳群発掘調査

- (1) 期間 6月
- (2) 場所 石原地内
- (3) 原因 個人専用住宅建設
- (4) 面積 73.50㎡
- (5) 概要

調査では、古墳時代後期（約1,400年前）の古墳1基のほか、土坑6基、ピット3基が検出された。古墳は、周溝のみが検出され、周溝内からは円筒埴輪片のほか、靱等の形象埴輪片も検出された。この周溝は、西に隣接して所在する石原古墳群第4号墳の周溝と考えられ、墳丘の様子しか分かっていなかった古墳の東端の状況が確認できたことになる。なお、墳丘は、現地表面上の計測で径約18m、高さ1.4mを測る。

調査地点は、現在も木々が生い茂り、第4号墳のほかにも前方後円墳と見られている第5号墳が墳丘を今に残している。

本墳を含む石原古墳群石原支群は、過去に幾度か調査が行われ、その全てに

において埴輪の樹立が確認されていることから6世紀後半代の築造と考えられるが、石原支群の北に展開する坪井支群には、埴輪を樹立し、川原石積みの胴張型横穴式石室から銅釧等が検出された薬師堂古墳が所在し、7世紀初頭前後の時期と考えられている。



第4号墳周溝完掘状況（奥が墳丘、東から）



周溝円筒埴輪出土状況

### ③ 諏訪木遺跡発掘調査

- (1) 期間 7月～8月
- (2) 場所 上之地内
- (3) 原因 個人専用住宅建設
- (4) 面積 78.66㎡
- (5) 概要

調査では、弥生時代中期後半（約2,000年前）の竪穴住居跡1軒、古墳時代後期（約1,400年前）またそれ以前の竪穴住居跡2軒、古代と考えられる掘立柱建物跡2棟、平安時代以降の井戸跡1基、縄文時代後・晩期の遺物包含層等が検出された。

弥生時代中期後半の竪穴住居跡からは、土偶形容器1点がほぼ完全な形で出土した。土偶形容器は、隣接する弥生時代中期～後期の大規模集落が確認されている前中西遺跡においても、同時期のものが破片や欠損している状態では出土しているが、ほぼ完全な形で出土は埼玉県初のことで、全国的に見ても数例しかなく珍しいものである。

土偶形容器は、中が空洞、頭部が開いていて、ここから物の出し入れができるものであり、主に福島県から愛知県に至る地域で発見されていて、その出土事例から、一種の蔵骨器と考えられている。また、小型であることから、赤ちゃんの骨や歯が入れられていた可能性があり、形状から祖先を表現したものとされ、弥生人の強く生命の再生を願う意味が込められているものと考えられる。

本例は、高さが約18cm、顎の一部が欠損している。頭部や底部外面には赤彩が残り、顔面にはイレズミを表現したと考えられる縄文、頸部には簾状文、お腹に添えられた両腕には4条の刻みが施され、5本の指も表現されている。また、女性特有の胸の表現がないことから、男性と考えられる。この土偶形容器の出土は、弥生時代の人々の死や埋葬に対する考え方などを知る上で貴重なものとなったと考えられる。



土偶形容器出土豎穴住居跡完掘状況



土偶形容器出土状況

#### ④ 前中西遺跡発掘調査

- (1) 期間 9月～10月
- (2) 場所 上之地内
- (3) 原因 個人専用住宅建設
- (4) 面積 60.00㎡
- (5) 概要

調査では、弥生時代中期後半（約2,000年前）の方形周溝墓1基のほか、古墳時代後期の土坑7基、ピット十数基、河川跡が検出された。

方形周溝墓は、弥生土器片が出土した隅が切れる周溝の東溝が検出されただけであり、墳丘盛土については分からなかった。今回の調査地点の東に隣接する街路築造工事に先だつ発掘調査でも、やはり弥生時代中期後半の土器が出土したほぼ同規模の溝跡が検出されていて、これについても方形周溝墓の周溝と考えられ、この周辺を含めて以北には数基の方形周溝墓の存在が確認されていることから、当時の墓域の様子がより明確になった成果であった。

河川跡は調査区の南東をかすめる形で検出され、すぐ南ではやはり街路築造工事に先立つ発掘調査で河川跡が検出されていて、位置的に関連している可能性もある。



調査区全景（東から） （奥に方形周溝墓の周溝）

## 5 元境内遺跡発掘調査

- (1) 期間 9月～10月
- (2) 場所 野原地内
- (3) 原因 個人専用住宅建設
- (4) 面積 57.54㎡
- (5) 概要

調査により、奈良時代（8世紀初頭、約1,300年前）の竪穴住居跡1軒等が検出された。この住居跡は、調査区の北東隅に確認され、全体を把握できる状態ではなかったが、東にカマドが設置され、床面は貼り床構造の住居であった。

その出土遺物には、土師器坏・甕、須恵器甕等が見られたが、特に注目されるのが須恵器の仏具が出土したことである。この住居において何らかの仏教的活動が行われていた傍証かも知れない。本調査区の約250m北には文殊寺が所在し、「文殊寺略史」によると6世紀末～7世紀前半の推古天皇の時代から文殊寺のある野原は開けた土地であったということであるので、このことから興味深い成果となった。



竪穴住居跡完掘状況



須恵器仏具出土状況

※なお、現在末広三丁目地内の前中西遺跡において個人専用住宅建設起因の発掘調査中である。